

要 旨

1 作成の背景

本見解は、「今に生きる・活かす古典——倫理・道德教育における古典活用の可能性」を主題に、高等学校公民科『倫理』『公共』を主たる対象として、現代教育において古典をいかに活かすかを検討したものである。グローバル化と価値観の多様化が進むなか、思考力・倫理的判断力・対話力の育成はいつそうの重要性を帯びている。そこで日本学術会議哲学委員会・心理学・教育学委員会合同今に生きる・活かす古典を考える分科会は、「古典」を国語科の古文・漢文に限定せず、世界で読み継がれてきた哲学・文学・宗教・歴史的文献等を広く含む概念として理解し、普遍的価値と多様な視座を若い世代の学びに組み込む道を探ってきた。検討は、哲学教育・教授法研究・P4C (Philosophy for Children, 子どものための哲学「P4C」「P4C/p4c」と略記) 等に関する最新の学術的知見と、授業観察・教員ヒアリング・模擬授業に基づく現場の実践知を統合し、多面的に行った。目指すところは、主に高校生を対象に古典への接触機会を持続的に拡充しつつ、短時間で反復可能な教材、対話型授業モデル、観点別評価枠組を整え、授業—評価—入試における選抜を一貫させる実装可能な方策を提示することである。2015年、2016年及び2020年の既往の提言・報告を継承しつつ、古典教育をめぐる社会的議論を喚起し、あわせて次期学習指導要領改訂に向けた検討に資する意思を表明する。

2 現状及び問題点

- ・授業モデルと評価の未整備：「導入（原典の一部抜粋）→問いの設定→根拠の提示→反証の検討→結語」の標準的モデルや観点別評価・短文論述の採点例が不足している。
- ・原典読解の意義の不明瞭さ：二次資料で授業が成立しやすく、古典の原典を読む教育的価値が共有されにくい。
- ・アンケートの示唆：授業が関心醸成の入口である一方、共通テスト等の入試科目の影響が大きく、科目選択や開講状況に歪みが生じやすい。
- ・フランスやドイツの中等教育とのギャップ：同国で一般化している原典読解の「型」、課題指示語の明示、評価観点の共有、要求水準の段階化に比べ、日本では該当する評価モデルの整備・共有が不十分で、限定的な運用にとどまっている。
- ・対話型実践の知見の共有・定着：簡易教材・短時間活動・簡便な評価方法といった対話型実践の知見は存在するものの、日本の教育現場ではそれらが十分に共有・検証・体系化されておらず、教室に根付く具体的モデルとして定着していない。

3 見解の内容

(1) 教育課程への組み込み

古典を「思考・対話・表現を促す学習資源」と再定義し、「導入→問い→根拠→反証→結語」の標準的授業モデルを学習指導要領解説に即して明示する。各科目で短時間に差し込める簡易型教材を整備する。

(2) 原典読解×哲学対話の一体化

P4C/p4c 及びドイツの哲学教授法を参照し、古典の原典を用いたグループ対話で「問い→根拠→反証→結語」を繰り返す授業を標準化する。

(3) 評価枠組の簡潔な共通化

思考の三相と観点によるルーブリックを提示し、短文論述・口頭応答・OPPA（一枚ポートフォリオ）で到達を可視化する。水準記述と採点例を公開して信頼性を確保する。

(4) 大学入試との接続の最小改革

大学入学共通テストは選択式のまま原典抜粋＋現代事例の連動小問で主張・根拠・反証識別を測る。個別・総合型は短い論述＋口頭試問と課題図書運用で学校の学習と接続する。設問意図と評価観点の透明化を徹底する。

(5) 教材の共同整備

東京都高等学校公民科「倫理」・「公共」研究会等と連携し、カード型教材・板書例・標準課題集を共同開発する。5～10分の短時間活動と簡易型評価ツールを中心に、学校ごとに改変・再配布しやすい形式で展開する。